

アナキズム/文学と思想

# イオム

イオム雑誌

萩原晋太郎 大門一樹 はぐま・なおよき 1

義務教育の無償化をめざして  
——教育現場からの報告—— 滝沢昇 6

江川允通さんからの手紙 江川允通 16

〔創作〕樹々の響き (1) 海田真生 24

ヨーロッパの旅 (7) 平山房子 16

フランス・オランダの旅から

労働に関する断章 (最終回)

職人・職工・労働者・労務者

日野善太郎

ことばの羽ばたきをもとめて……

70年代なかばの今日、日常の生活  
と思索の中から生まれる《夢》と変  
革への《志》に確かなかたちをあた  
え、共同のものとしていくために……

\*タイプ・タイプオフ印刷

摩耶プリント

神戸市葺合区上筒井通6丁目2-13

PHONE (078)242-4573

黒色戦線社 出版案内 (アナキズム研究書)

- 八太舟三・純正無政府主義 (農村社会問題講座) (一五〇円) 階級闘争説の誤謬 (一三〇円) 無政府共産主義 (七〇〇円) ■石川三四郎・弁証法的唯物史観の批評 (一五〇円) 進化と革命ルトリュ (一五〇円) 無政府主義とサンジカリズム (一五〇円) マフソの農民運動 (一五〇円) ■岩佐作太郎・無政府主義者は答える (一五〇円) ■石川三四郎・近藤憲二他・日本無政府主義運動史 第一編 (三五〇円) ■和田久太郎・獄窓から・増補版 (八〇〇円) ■古田大次郎・死刑囚の思い出・増補版 (七〇〇円) ■天皇制破壊への渦動 一・二皇居発煙筒事件訴訟記録 植谷雄高氏の天皇制批判の証言収載 (三〇〇円) ■黒色戦線社編集・難波大助大逆事件 (九〇〇円) ■マラテスタ・無政府主義組織論 (一〇〇円) 選挙戦に際して、付略伝 (一五〇円) 農民の中へ (二〇〇円) 無政府主義論 (三〇〇円) 大杉ら十二氏・反逆者の牢獄手記 (二〇〇円) ベルテロー・山鹿泰治訳・平民の鐘―無政府の福音― (一五〇円) 労働運動大正十三年三月号 発禁・大杉栄・伊藤野枝追悼号 (四〇〇円) ■石川三四郎・西洋社会主義運動史 (一〇〇〇円)
- 大杉栄・望月桂 共著 漫文漫画 五〇〇円
- Aベルクマン・ロシア革命の批判 (二〇〇円) バレット 鈴木靖之訳 アナキスト革命 (一五〇円) 右二書新訂版
- 黒色青年連盟機関紙 黒色青年 二〇〇〇円
- 大正十五年四月創刊号より昭和元年二月終刊号まで完全複製
- 黒色戦線社
- T372 群馬県伊勢崎市巾和田 振替東京11015

1975-9 N-ro 9

イオム 第9号 (季刊) 発行日1975年9月1日/発行者\*イオムの会\*神戸市葺合区

熊内町1丁目5-3/編集\*イオム編集委員会

¥250

## 和田信義という人

萩原晋太郎

和田信義氏の名は運動史の中で散見されるから、ご存知の人は多いであろう。だが、ご本人と交際のあった人は、今では荒畑寒村氏、安谷寛一氏、柳沢善衛氏、広海寛一氏、添田知道氏ぐらいと思われる。過日、界子未亡人から話を伺うことができたので、紹介したい。

和田の両親は長野県松代に生まれた。現在の松代小学校が、その屋敷跡である。佐久間象山は信義の大叔父であった。

信義は一八九二（明治二五）年九月二四日、岐阜県大垣に生まれた。

一九一八年、郵便局に勤めていた彼は、米騒動に加わって、荒畑寒村、尾崎士郎と共に淀橋署に検束された。石橋澹山が身柄引取人にまわって、釈放された。それ以後和田も尾行つきになった。写真で見ると、生田春月に似た好男子だったようだ。

柏木の東光園に勤めて、『歴史写真』や『婦女写真』

を出した。雑誌『不平』に「社会主義神髓」を書いて発禁になった。

一九一九（大正八）年八月、堺利彦に推されて大阪に行き、『日本労働新聞』の編集長になった。大杉栄、堺利彦、山川均、山川菊枝、宮島資夫、荒畑寒村、和田久太郎、辻潤、加藤一夫、川合仁、添田平吉（啞蟬坊）ら〔順不同〕と親交があった。

労働運動座談会もよくひらいた。当時同志社の学生だった水谷長三郎も、よく出席したり寄稿したりした。

のち、日本労働新聞は荒畑が編集するようになった。一九二〇年、和田は兵庫県の防疫官吏になった。須磨の住まいには、柳沢や広海がきて寝泊まりした。翌年、和田は右文館藤井書店から、小さな詩集『蹴らない馬』を出版した。

一九二三年、大杉がフランスから帰ったとき、伊藤野枝が魔子をつれて須磨にきた。一同で神戸港に出迎え、旅館で小憩したことがある。

一九二五年、安谷寛一らと『悪い仲間』を発行した。余談になるが、安谷の話によれば、安谷は和田にそののかされて一九一九年一〇月頃から、神戸ロンダ組を根拠に「変則仏学塾」をはじめた。フランス語などそっちのけの、社会思想研究会であった。塾生には、鈴木柳

介、鈴木靖之、小松清、遠藤斌、芝原淳三、二見敏雄ら  
がいた。神戸相生橋警察署前の古ぼけた三階家、その二  
階の一室がロンダ組の本拠だった。一日じゅう電灯をつ  
け放しにする暗さであった。京阪はもとより、東京から  
もよく同志がきては宿がわりにした。「種蒔く人」をは  
じめる前の佐々木孝丸や、高尾平兵衛、吉田一、三田村  
四郎、村木源次郎もよくきた。……

和田は『新社会』に短篇をのせたり、『生活と芸術』  
(土岐哀果発行)に詩や歌を寄稿したりした。同年一二  
月、妻子と一しょに上京した。上京する金に困って、刀  
を売り、堺から貰った幸徳秋水の書いた「平民新聞園遊  
会」の大ノボリを大原社研に売った。

一九二八年から二九年にかけて、彼は山谷のドヤ街に  
住む香具師と一しょに、北海道から九州まで廻った。わ  
ずか三〇分か一時間の商売も、地もとの警察に妨害され  
る。和田には尾行がついている。尾行にたのんで話をつ  
け、商売させて貰う。それが和田の生活費になる。「情  
ない生活を……」と妻は歎いた。

この体験をもとに、彼は二九年、文芸市場社から『香  
具師奥義書』を出版した。

姉夫婦が千葉にいたが、夫婦仲が悪かった。別れたい  
というので、和田が仲裁に行った。その時貰ったウイス

キーがメチルアルコール入りだったらしい。肝臓を悪く  
して、半年患ってこの世を去った。娘の百合子は、「今  
は死ねない」と和田が悲痛な言葉を残したのを忘れられ  
ないという。一九四三(昭和一八)年六月八日、五一歳  
であった。

イオム雑記

リベロ編集雑感―貧乏くじ話―

はぐま なおゆき

そもそもリベロとは、CIRA・NIPPONの通  
信『ばおばぶ』を引継いで『センター通信』とし、それを  
さらに改名し、エスペラントで自由という意味の『リベ  
ロ』としたもので、出発はCIRA・N(以下NIP  
PONをNと略す)の機関紙なのである。

それがどうした訳か段々情報紙としての役割を多くお  
びだして、CIRA・Nを支援する関西の有志が出す情  
報紙となってきた。CIRA・Nの事務局のNさん、O  
さんが主力であった時代から、京都のKさん、Yさん、  
大阪のKさん、Mさん、そして今の主力は神戸共同文庫  
の人達と、京都のOさん、Yさんで、ある人は細く長く、

ある人は太く短く編集に加わってもらった。発送や印刷  
の手伝いをしてくれた人も加えたら、今まで優に百人以  
上の手をわずらわしているだろう。このような人的つま  
がりにリベロ発行の大きな意義がある。

二年ほど前のCIRA・Nの事務局会議の月例会で、  
実質的に事務局を支えている四人のメンバーで大まかな  
役割分担をしようということになった。富士宮のRさん  
がCIRA・Nの管理をし、Nさんが事務の担当をし、  
東京にいたOさんがCIRA・Nの資料を公表し活用す  
る『アナキズム』の編集をし、そして京都の私が通信紙  
『センター通信』の発行という「貧乏くじ」をひいたの  
である。同じ「貧乏くじ」なら、月刊であるなら、おま  
けに情報ものせてしまえと考えたのが運のつきだった。

まず苦労したのは第三種郵便物認可をとるために、リ  
ベロの体裁を整えて、郵便局にお三度をおみに行くこ  
とだった。誰でもまず原稿集めに一番苦労するだろうと  
予想するものだが、それが案外私の方としては気分的に  
は苦労したという覚えがない。たしかに原稿集めに時間  
は費したが、「原稿が集まる分だけ使って、原稿不足だ  
ったら八ページになろうと、四ページになろうとかまへ  
んわ」と考えていて、「内容より続けて出すことに意義  
がある」などとも考えて、時間をかけて体裁と内容を徐

徐によくしていこうという方針で、あまり無理をしない  
ことにしていた。「第三种で二四ページの厚さまで、一  
二円で送れるから、二四ページになるまで徐々に原稿を  
増やしていこうか」といった風に。

でも情報紙なんて相場はどこでも貧乏くじに決ってい  
る。四年ばかり前、大阪の高殿にあった『自由連合』社  
へ、激励のつもりでアイデア提供に行った。「ルポばか  
りでなく独自の運動のレポートをのせたら」とか、「ミ  
ニコミの紹介ばかりでなく独自の主張をのせたら」と、  
少し不満たらしく私がいったら、自連の編集スタッフが  
いうのには、「じゃ、あなたはこれから自連に對し何を  
するつもりですか？」と聞かれて、ウムと考えてしまっ  
た。その時、私は主体ぬきの評論しかしていないことに  
気づき、返答する言葉がなかった。その頃、時々自連社  
をのぞきに行けば、手作りの封筒作り、アンケートのま  
とめ、封筒の手書き、カットに時間のかかるガリ切りと、  
いつも戦場のよう。その有様は近代的オフセット印刷工  
場と比べれば、月とすっぽんであった。情報紙という、  
サービスか雑用にしか端目には見なされない、いわゆる  
情報紙という貧乏くじを自分だけは引くまいと思ってい  
たのが、正直な所當時の本音であった。

ところが今、その貧乏くじを見事に私が引いてしまっ

たのだから、その弁解をここでする必要があるだろう。

二年前、リベロ編集部でまず起こった論議は、CIRA・N発行をやめて、有志発行にするかどうかということだった。現実には関西の少数しか編集に関われないし、日常的にCIRA・Nと関係のない所で編集されているということ、結局、リベロは有志発行になつたが、「有志」といって、CIRA・Nを支持する「有志」に、限定することには異議はなかった。この時点から、CIRA・Nの会計と縁が切れて独立採算制となり、フトコロは厳しくなった。

一年前、次に起つた論議は、機械的に情報紙に徹して、第三者的に情報を集め論じるか、それとも編者の主体性、主張をもっと表に出すか、という問題だった。その時の討論を七五月二月号に「情報紙における自由連合の追求について」という見出しでまとめてみた。

今、再度読み直してみれば、この文はやはり駄文のようである。編者の思づかいが伝わってこない、行間の意図が落ちていた駄文のようである。結論的には、編集会議でよく編者の意見を交換し合い、編者で主体的編集を行うということだが、一方では文の中で一人称は極力避け、三人称を用いて情報紙としての体裁を調えようという、妥当な線に落着いた。

最近編集部で話されていることを少々紹介したい。リ

ベロの題字は東京のYさんにいくつか試作してもらい、ワイワイと論争した末、今の題字に落着いた。表紙は毎回ディスカッションして、内容と関係あるもののみを選んで決定することにした。阪本さんの似顔絵、FRI号、マーチン・ソスターの顔の切り絵等がそれである。

内容については、これからの課題だが、編者が今やっていること、今思っていることをどんどん書いていくことと、関西の各グループの毎月のなんらかの情報を連続して出しつづけることを目標としている。

x x x x x

苦情たらしくなるので言いたくないが、読者カードの整理、返信、封筒の用意などの雑用で忙殺されるので、この編者はまだ、編集が少しづつ面白くなりつつあるにもかかわらず、「貧乏くじ」を引いたと思っている。さて今後、情報紙編集が「貧乏くじ」のままであるか、それとも「当りくじ」になるか、これからのアナキズム運動とアナキズム思想の拡がりいかんにかかっていると思う。ここらで、とりとめのない「貧乏くじ」話を終りにして、次回に書く時は「当りくじ」の分け前の話でも、書きたいものだ。

イオム雑記

## 笏とコン棒

大門一樹

—セールスマン、小売商人、労働者（または失業者）、原稿生活者、売春婦、芸能人、その他、売って金を得なければ生きられない側の人間に浮ぶ金についてのひとつの視点—

ぶふい！ やつらは自分の気に入らなければ買わない。こちらはカネがどうしても要る。だが買う買わぬはあいつらの食欲な、気まぐれな意志次第だ。

金を持つやつらにはその金で「買う自由」と「買わない自由」がある。売らねばならないものにとってはそれいつらの「買わない自由」はなんて残酷な「自由」だろう。金には「買わない自由」があるというところはオレらがどんなに金がほしくてもやつらに「買わせる自由」はないということだ。

ぶふい！ 金のあるやつは買わない自由を武器にしてやつらのぞむような条件でなければ買おうとしない。

互いに利益なら売り買いしよう、いやならやめとこうの自由合意、そんなきれいだとはない。「いや」というやつは説得したり泣きおとしたり、脅して買わせるより他はない。大抵は泣く泣く安い値段で買ってもらおうというのがオレたちの立場だ。

やつらの勝手に残酷な「自由」のなかで「金は力」のイメージが出てくる。金に力があるような錯覚が生まれてくる。金力とか金力支配のことばで金を持つ人間にいうことをきかされる関係を感じる。

金は売買の「媒介物」などというノンキな定義よ、向うへ行け！

どんなに困っても哀訴しても、おかまいなしに買う買わないは自由という金のもつ強引性、いったい、これはどこからくるのか。イヤというやつらに「買え」と迫ればオレたちは叩きのめされる。これはオレたちのだれでもが否応なく知らされている。ここから、売らねば生きられぬオレたちが「買う買わぬは自由」とか「金の力」などとまるで金のあるやつと同じように考えるようになっていく。叩きのめされる凶悪なコン棒がいやだからオレたちはヤツらの買わない自由をあたり前のように受け入れるようになってしまっている。金の力とはコン棒の力であるが、それを金の力と錯覚している。紙キレに力

はない。聖徳太子をみているかぎり「金の力」を錯覚する。もっとも聖徳太子は昭和三年に、両手に長い笏をもって一萬円の保証人のような顔で登場したが、一萬円の中味は二千円くらいになってしまっている。笏を

レポート — 教育現場から —

## 義務教育の無償化をめざして

滝 沢 昇

の体制の中で切りきざんでいく。学校とは誠に恐ろしいところである。

\* 「服装、服装いうんやったら、制服こうたれや。制服着る方がずっと高うつく先生知っとんか。小学校のままの服装やったらゼニいらんのに、中学校へ入学するのにごっつうゼニいるんやで。母ちゃんが走りまわったんを先生知っとんか」

\* 義務教育の完全無償化が叫ばれてから久しいが、いつの間にか父母の教育費負担軽減ということばに変化してしまっている。しかも公費で肩代わりする——などということさえある。無償ではなく、軽減である。文字どおり、軽く減らすのである。

どこの小、中学校でも、子どもから多額の金を集めて、知能テストや実力テストをしているのが現実である。しかも、それらのテストにより、子どもたちを差別と選別

私は 十二年間、義務教育に多額の金がかかるのは、「しかたないもんや」「そういうもんや」と思い込まされてきた。義務教育無償化ということ、ただ観念的にとらえているにすぎなかった。親や子どもたちの生活が何も見えていないところで、憲法にうたっているから無償化するのが当然であるとしたか考えなかった。だから教師でありながら、それが「テーマの問題」になり得なかった。生活保護家庭の父母たちに「教育扶助は家庭渡しになっていきますから、生活保護費の中から学校諸会費を納入して下さい」というふうになって来たボケた教師であった。しかし父母の生活実態が見えてない、子どもの姿が見えてないところに教育などありようがないことを知らない無能教師から闘う教師へ自己変革していかねば、子どもたちを殺す教育に加担することになる。

### Dの欠席と諸会費の袋

Dはよく学校を休む子だった。三畳一間の家で病弱の母と二人暮らしである。家庭訪問した時、暗い窓のない部屋で母と子が寝ていた。私の声をきいて起きて来てくれた母は、ただ「学校へ行け、行けいうんやけど休みたがって困ります。別に悪いところはないし、あした行かせます」というだけだった。だが翌日も休んでしまう。も

う一度訪問をする。母は、自分の病気のこと、父さんのこと、生活保護だけで生活していることを少しずつ語ってくれた。五十円、百円に困る生活の話の中で、諸会費の納入がきわめて困難である事実をはじめて知らされた。私が今の学校に来た年、「保護家庭は諸会費全免」の制度はなかった。家庭の事情により担任の判断で、学年末に免除申請をすることになっていた。

Dの欠席が諸会費の集金と関係があることがわかってきた。「あの袋のことなら心配せんでええで。持って来なくてもええんやで」という声を聞いたDは、ふとんから這い出して「先生、あしたから行くわ」といってニコリする。免除制度があることを説明して、利用することをすすめた。母も本人も納得した。ところが、校外学習（遠足）で交通費を集金した時、Dはまた欠席してしまふ。Dは校外学習に出かけることを母に話せない。電車賃だけでなく、弁当があるからだ。母に話すと「また金がかかる」とグチをいわれるし、休んだらもうかるから母に話さなかったのだという。子どもなりに諸会費の袋とちがうと考えていたのだ。役所から校外学習費が出るので、学校へ来る時と同じ弁当を持って参加するようになり、やっと納得してくれた。

数か月たってから、また連続して欠席するようになって